

プロメテウスの運命

3. 11と現代文明の危機

服部 英二

はじめに

「プロメテウスの罍」とは朝日新聞のコラムの題名だが、本論は罍ではなく「運命」である。天界から人類に火をもたらしたプロメテウスがその後どうなったか、を知るべきなのだ。このティタン族の末裔は、ゼウスに背き、火すなわち文明を人類にもたらした、というその罪を背負い、カウカソス山の頂に縛り付けられその肝を鷲についばまれる、という刑に処せられる。それで死ぬば楽なのだが、彼の肝は毎夜再生する。最後にヘラクレスに救い出されるまで、プロメテウスは、半永久的に、自らの肝を毎日猛禽についばまれると言う苦痛を味わわねばならなかったのだ。

古代ギリシアのこの神話の秘めるものが、3. 11で顕わになった。単に原子力発電と言うが、そこに燃えている火は、ただの火ではない。分裂を繰り返す核、すなわち太陽のような天界の火だ。中沢新一氏の言を借りれば、生態系を越えた「一神教的な火」が、第二次大戦のおかげで人類社会に持ち込まれたのである。人類はかくしてプロメテウスのように、永劫に肝をついばまれるに等しい苦痛を強いられることとなった。

世界的に見れば、今やヒロシマ・ナガサキと同様に有名になったフクシマは、文明を変えるのか？ 今それが問われている。われわれは、文明は変わる、いや変えなければならぬ、と信じる。科学革命以来矢のように直進してきた文明は、フクシマによって折り返し点に立ったのである。マラソンの折り返し点のように。もしここで折り返すことなく直進したら、その先で人類を待っているのは深淵を見降ろす崖である。

わたしの関与している地球システム・倫理学会は、東日本大震災の直後に活動を再開した。そして4月11日付けで、世界に向け日・英両文による「緊急声明」を発信した。それに対し世界各地の多くの識者から熱烈な賛同の声が寄せられ、ほどなくしてこの声明は9カ国語となって数多くのウェブサイ

トに載り、さらに幾多の学会・学術誌、はては単行本にまで引用されることとなった。あらためてその声明（日文のみ）をここに紹介しておきたい。

日本地球システム・倫理学会緊急アピール

国連倫理サミットの開催と地球倫理国際日の創設を訴える

平成23年 4月11日

日本地球システム・倫理学会
会長 服部英二

世界が直面する危機は経済危機でも金融危機でもなく文明の危機であり、その解決には人類の叡智の地球規模の動員が必要とされます。

このたび日本を見舞った未曾有の大震災と津波による数十万人の生命線の破壊、更にそれが惹起した福島原発事故は、日本のみならず世界に人間の生き方の変革を迫る「母なる大地」の警告にほかなりません。

「自然を統御し支配する」という17世紀以来の科学文明は、破局に人類を向かわせる「力の文明」であり、理性至上主義の父性原理に基づくものであります。今やこれを、命の継承を至上の価値とする母性原理に基づく「いのちの文明」へ転換すべき時です。このパラダイム転換こそが、すべての民族が、そして人間と地球が共生する「和の文明」を築く基盤であります。諸文明に通底する倫理とそれに基づく人の絆を築き、未来世代が美しい地球を享受する権利を尊重する新しい文明の創設が待たれます。

日本はついに軍事・民事の双方で原子力の犠牲国となりました。日本は国際社会に核廃絶を訴え続けてきました。当学会としては、日本は今や自国のみならず世界が、エネルギー問題においても、脱原発に舵を切ることを訴えて行く責務を負うに至ったと確信します。この責務を果すことこそ今回の不幸を無駄にしない唯一の世界への貢献であると信じます。

人類が直面する危機の根深い原因は世界的に蔓延した倫理の欠如であります。未来世代に属すべき資源を濫用枯渇させるばかりか、永久に有毒な廃棄物及び膨大な債務を後世に残すことは倫理の根本に反します。市場原理主義による寡奪文明からの脱却が急務であります。

このような状況を前にして、本学会としては、一日も早く国連倫理サミットを開催し、「地球倫理国際日」を創設することにより、毎年倫理の重要性に思いを馳せる機会とすることを国際社会に提唱するものであります。

学会事務局 E-mail : ntatiki@reitaku-u.ac.jp

学会 URL : <http://jsgse.jp/>

ここでわれわれが強調したのは、第一に、人類の直面しているのは、メディアに溢れている経済あるいは金融の危機ではなく、文明そのものの危機である、ということであり、これは私が2011年9月にパリで会談したミシェル・セールも深く同意してくれた点である。

第二に、地球と人類の生存のためには、科学革命に始まる男性原理（父性原理）に律しられた「力の文明」を、母性原理の見直しにより「いのちの文明」に変えなければならぬ、という指摘である。「母性原理とは、いのちの継承を至上の価値とすること」は鶴見和子氏の言葉であった。

第三の指摘は、核兵器と原発は切り離せない、という認識である。ヒロシマ・ナガサキに続き、日本は世界で唯一軍事・民事の双方での核の犠牲国となったのである。この点では、その後行われた、2011年カタルニア賞受賞式典での村上春樹氏の講演を評価したい。

第四の主張は、強欲な篡奪文明の結果として子孫たちに永劫の放射能汚染を残す行為は根本的に倫理に反する、という点である。およそ環境問題とはモラルの問題である、とアル・ゴア氏は述べているが、解決策の見つからない放射能をまき散らし生活環境を汚染し続けるのは、後述する国際機関での我が国の言動と照らしても背信行為であることに気づかねばならぬ。

第五に、われわれはこうした問題を熟議する「地球倫理の日」の設定を国際機関に要請することを申し合わせた。そのためには時間を要するであろうが、その実現に向けて努力を惜しまない決意の表明である。

生命誌の中の人類史

中村桂子氏の説く生命誌という視座から見ると、人類史と言うものは実に短い。

それを文明史に限るなら更に儂い存在である。

ビッグバン——137億年前。

太陽系の誕生——46億年前。

生命の誕生——38億年前。

人類の発生——600万年前。

ホモ・サピエンスの出現——20万年前。

農業革命——1 万年前。

都市革命——5000年前。

精神革命——2600年前。

科学革命——300年前。

1 億年を1kmとした時、太陽系の誕生からの距離は46kmであるが、ホモ・サピエンスの誕生は目の前の2m、農業革命からは10cm、科学革命からはただの3mmである。この3mmの中で人口爆発が起こり、エネルギー消費はそれをまた10倍する超新星なみの爆発的増加を記録している。人類誕生からの600万年の命の流れから見ても、人類史の2万分の1の時間帯に異常な出来事が発生していることがわかる。

実は生物種の大量破壊は、生命誌38億年の中で6回起こっている。そのうちの5回は巨大隕石の衝突による、とする説が今は有力である。ところが現在地球上に存在する約3000万の生物種のうち、毎日100種が姿を消してゆく、という現実がある。これは過去数世紀と比べても約100倍のスピードであり、しかもこのスピードは年々加速している。すなわちこの第6回目の生物種大量破壊は、人類と言う一つの種によって引き起こされており、しかもそれが最近の100年に集中しているのである。

多様性の減少

現在われわれは多様性の減少、画一性への移行という大きな問題に直面している。これは自然界における種の消滅と共に文化の領域でも起こり、世界に現存する言語の内約半分の2500の言語は今世紀中に消滅すると危惧されている。経済至上主義の拡大と共に、英語という疑似世界言語が現れ、少数民族の文化をブルドーザーのように破壊して行く現象が見られる。UNESCOは2001年「文化の多様性に関する世界宣言」を採択したが、その第1条には「文化の多様性は、人類の生存にとって、自然界に多様性が必要なごとく、不可欠である」ことが明記された。すなわち文化の多様性こそが人類の財産である、というのだ。この認識は1995年の国連大学におけるユネスコ創立50周年記念シンポジウム「科学と文化；未来への共通の道」におけるジャック・イヴ・クストーの証言¹⁾に負うところが大きい。更に2005年、パリ・ユネスコ本部で行われた60周年記念式典の記念講演を齢98歳にして引き受けたク

1) クストーの基調講演全文は『科学と文化の対話—知の収斂』（麗澤大学出版会、1999）に収録。

ロード・レヴィ・ストロースが、「文化の多様性と生物多様性は、単に類似しているのみならず、有機的に結びついている」と明言したことにより、その重大さを倍増させることとなった²⁾。

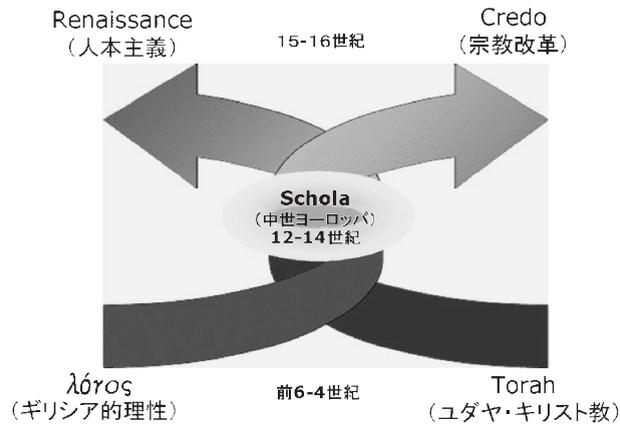
国際的知性は、すでに、すべての存在は、相互に結びつき、互いに助け合いながら生きていることを感知しているのである。この Interconnectedness (万有相関) という存在の実相を知れば、他者の存在は、かつてのように単なる寛容の対象ではなく、自己が存在するための必須要件なのだ。私はすべての他者のお蔭で生かされているのである。思い起こせば、私との対談で、鶴見和子さんは自らの曼荼羅の思想をこう述べていた。それは「異なるものが、異なるままに、互いに助け合い、補い合って、共に生きる道」である、と。

科学革命は宗教との熾烈な戦いの産物

多様性を排し、世界を画一性に導いていくものの根拠は科学技術にあることに異論はあるまい。伊東俊太郎氏の5大革命説によれば、人類革命・農業革命・都市革命・精神革命の四つは同時多発的に世界の各地に起こっている。しかるに17世紀の科学革命だけは西ヨーロッパと言う一地域だけに起こった。これが続いて産業革命となり、この地域を飛躍的に「近代化」し、世界の盟主を競いあう列強という近代国家を生み出し、植民地主義と相まってその「進歩」の価値観が世界中に伝播して行くのであるが、何故この第五の革命は、この西欧のみに起こったのであろうか、を問わねばならぬ。

この問いへの答えはただ一つしかない。それは他の地域に起こらなかった「聖俗の葛藤」、すなわち宗教と自然科学との戦いである。ヨーロッパの本質をギリシア的理性(ロゴス)とヘブライ・キリスト教的信仰(トーラー・クレド)の合体であると考え、それを可能にしたのは4世紀キリスト教を公認したローマの存在であったことに気づく。条理と不条理というこの相反する二者は、そのローマがかつてリュテシアと名付けた町の神学校ソルボンヌで、13世紀、イスラーム世界が仲介したアリストテレスの形而上学と自然学をアウグスティヌス等の教義神学と合成したトマス・アキナスのスコラ哲学によって奇跡的に止揚されたかに見えたのだが、内包された矛盾の学的合成は永くは続かず、やがて再分裂の時を迎えることとなる。中世の黄昏、一つはルネサンス(理)に、もう一つは宗教改革(信)へと。

²⁾ 服部著『文明は虹の大河』(麗澤大学出版会、2009)「レヴィー・ストロース最後の講演」参照。



ロゴスとトーラー図
(Hattori 2011)

すなわち、アラビアから古典的ギリシア科学の導入を受けた西欧は、12世紀ルネサンスを経てイタリア・ルネサンスにより科学的視座の基本を獲得したのであった。それは根本的にヘブライ・キリスト教の世界観とは相いれないものである。しかし一方それまでに確立された教会の権威には犯しがたいものがあつた。それ故15世紀から17世紀、ヨーロッパはこの矛盾する二つの世界を同時に生きることとなる。その矛盾を切り抜けようとしたのが「二重真理説」である。それは、価値を問わない真理は科学に、価値を問う真理は宗教に、端的にいえば「真理は科学」、「倫理は教会」という棲み分けであつた。

この時のいわば暗黙の取り決めが、その後世界を圧して行く近代科学の基本的性格を決めた、と私はみている。すなわち科学は価値を問わず (Value free) という立場である。そしてこの立場こそが、のちにガス兵器を含む大量破壊兵器の発明、ひいてはマンハッタン計画に結ぶものとなって行くものに他ならない。

17世紀、両者の拮抗は科学の勝利となって終わる。この数世紀にわたる理性と信仰の熾烈な戦いがあるこそ、勝者となった科学は発射台を離れたロケットのように上昇、加速して行くこととなったのである。ちなみにアジアの精神伝統にはこのような葛藤が無かつた。そこでは真理とは常に倫理的なものであり、何よりも理不尽のもとである超越神が不在であつた。

こうして宗教に勝利した科学は、続いて産業革命を引き起こす。1800年を境に西欧の科学技術はそれまでの先進国中国のそれを抜きさり、この時点か

ら西欧による世界制覇の時代が始まったのである。

科学革命は何を変えたか？

科学革命が変えたのは、何よりも人と自然の関係である。人はこの時自然と「離婚」する。デカルトが『方法叙説』に記した“(L’homme est) maître et possesseur de la nature.”(人は自然の主人にして所有者である)という言葉³⁾は、本当はその前におかれた‘comme’ (恰も) というニュアンス抜きで語られるべきではないが、当時の科学に目覚めた人間の自然に対する態度を明示していることは間違いない。自然は客体となり、科学の対象となる。その自然とはいのちの通う自然ではなく、精密機械のような自然である。したがってそれは支配と制御の対象となる。これを機械論的世界観というが、自然の法則を読み解き、利用する方法が発明と呼ばれた。自然を切り刻み、数量化することが科学的とされた。人間もまた数量化される。産業革命における労働者がそれである。

この自然支配を『創世記』の神の言葉、すなわち六日目に人間を創りたもうた神が述べたとされる「産めよ、増やせよ、地に満てよ。地を従わせよ。また、海の魚と、空の鳥と、地に這うすべての生き物をおさめよ」⁴⁾に基づいて正当化しようとする者もいる。しかしこの立論は矛盾している。何故ならば科学革命とは何よりも聖書の記述の不条理への挑戦であり、それに勝利したものが自らの否定した文書を根拠とすることは許されないからである。ちなみにイスラームの方では、この文言は、「神から信託されたものとして」と理解されており、神を信じない者は当然この権利を失うこととなる。

デカルトの目は神の目——啓蒙主義と父性原理

理性は光であるとする啓蒙主義は18世紀という *Siècle des lumières* を生み出したが、この理性至上主義は男性原理、更に言えば父性原理主義を生み出す。それは人間の本性である感性・霊性を下位におくものであった。その結果「百科事典」を造り、科学技術を飛躍させた啓蒙主義は、同時に差別の原理となったことに留意せねばならぬ。それはとりわけ女性・子供・非西欧民族を差別した。何故ならばこうした存在は十分に理性を使いこなせない未熟

3) “Discours de la Méthode”, Sixième partie, l. 60-61. (原文は工作を行う人間を記述したもので、人、主人、所有者とも複数、しかしこの言葉は科学時代をあらわすものとして独り歩きし、単数で使われることが多い。)

4) 「創世記」1-28。

な人間とされたからである。

理性とは優れて「分ける」能力であるが、そのはじめに位置するのが主客の分離である。Sujet と Objet が峻別される。デカルト的理性から見れば「考えるわれ」すなわち「意識」以外のすべてが「対象」である。身体を脱した一つの理性的主体のみが存在する。それはもはや世界内存在ではない。世界を対象化する理性、デカルトのこの目は、実は失われた神に代わる目であったと言ってよい。かくして人間存在は限りなく抽象化され、そのホリステイックな実体を喪失して行く。オーギュスタン・ベルクによれば「人間はその存在の半分を喪失した」のであった。

存在から所有への価値の転移

産業革命以降の近代に見られるあくなき所有慾の拡大は、この事と関連している。自らの存在の半分を失った人間が本能的にその空虚感を埋めようとすると、それが所有慾となる。そして人の価値は「～である」よりも「～を持つ」で計られることとなった。土地・屋敷・船・財宝・権力といったものである。植民地主義はこれにより正当化された。それは宗主国の所有慾を満たすものであったが、同時に「野蛮人の蒙を開く善き行為」として正当化された。

しかし、ガブリエル・マルセルがいみじくも指摘した通り、「存在 Etre と所有 Avoir は、反比例の関係にある」⁵⁾のだ。所有が増大するほど自己の存在は減少して行く。人の内なる生は貧困化して行く運命にある。ところが近代、富国強兵を競った列強は、こぞって所有慾の権化であった。終戦後、植民地主義もまた終焉するが、その代わりに台頭した市場原理主義、なかんずく金融工学は、この所有慾が変身して継続発展した形態にほかならず、人類を紛争から壊滅に導く力を秘めている。

外閉

ベルクの用語に「外閉」(Forclusion)があるが、これは近代的理性主義により確立された自己が、時空の中で孤独な存在、すなわちハイデガーの言う「死に向かう存在」(Sein zum Tode)として、われに関せぬすべての問題を閉めだす、つまり「外に出して戸を閉める」ことである。この態度が、フク

5) Gabriel Marcel "Etre et Avoir" Ed. Aubier, 1934.

シマでも原発関係者の中に見られた。住民の命よりも自分たちの組織を守るため情報を隠蔽しようとする、メルトダウンの実態を数カ月も隠しとおす、ヒロシマの168倍のセシウムのは放出は、「直ちに健康に影響するものではない」とされる等々である。特に重大なのは、子供たちのいのちに計りしれない害悪を及ぼす放射能廃棄物の最終処理方法は現在地上のいかなる国も発見していない、ということが無視されていることだ。その中で放出され続ける放射能の中にはその消滅に数十万年を要するものもあるのだ。これはホモ・サピエンス全史に相当する時間である。

われわれの子子孫孫が美しい地球を享受する権利があるとする「未来世代の権利憲章」⁶⁾は、30年ほど前、ジャック・イヴ・クストーが始めた運動であった。彼の言葉で印象的なのは「われわれはこの地球を未来世代から信託されている」と言う表現である。この憲章は、クストーの没する1997年、ユネスコ総会において満場一致で採択された「未来世代のための現世代の責任宣言」⁷⁾となって結実する。この時世界は未来世代を「外閉」せず、いのちの繋がりの大切さを謳った。しかるにこの宣言に賛成した日本を含む先進諸国が、未来世代に対して有害な放射能を出し続ける行為をやめないならば、それは背信行為である、と言わねばならぬ。そして、もし自国では止めるが他国には輸出すると言うような行為があるなら、それこそが「外閉」である。

殺すための燃料

核燃料は人類史の中で、他の燃料とは出自を異にすることに注意せねばならない。20万年に及ぶ時間帯、ホモ・サピエンスにとって、燃料とは基本的に樹、すなわち森であった。大地と水が育んだ森の一部を、生きるための二つの基本的行為；「食べる」、「暖をとる」のために使わせてもらってきたのである。19世紀からは化石となった森を使わせてもらうこととなった。すなわち化石燃料たる石油・石炭である。これが人口爆発の基となったのであるが、よりよく「生きるため」の発見であったことは変わらない。しかし、核燃料

6) Bill of Rights for Future Generations. 全世界で200万人以上の署名を集めた請願書。

7) Declaration on the Responsibilities of the Present Generations towards Future Generations, UNESCO 1997. 1995年初頭、南太平洋でのフランスの駆け込み核実験に抗議したクストーは国家のすべての役職を辞任、注1の東京シンポジウムに参加した際、同じくそのために来日したマイヨール事務局長に「未来世代の権利国内委員会」を「国際委員会」としてユネスコで運用してほしいと依頼、マイヨールは直ちにMAB（人と生命圏部局）に命じてこの任に当たさせた。ただ1997年の同宣言採択時、「現存しない人間が権利をもつことはできない」とのまさしくデカルト的の反論が起こり、「未来世代の権利」の語が消え「未来世代のための現世代の責任」となったのは惜まれる。

は根本的にその出自を異にするのだ。それは「殺すため」の発明であった。1945年、ロスアラモスでのマンハッタン計画の完成は、世界を変えた。ヒロシマ・ナガサキでの大量殺戮を正当化するあらゆる言動が駆使されたが、これは明らかにホロコーストに匹敵する人類に対する犯罪である、と声明すべきだ。

オッペンハイマーは、その時「無償の義務」を説く『バガヴァッド・ギーター』の一節を唱えていたと伝えられるが、アインシュタインはこの犯罪の発端の一翼を担ったことを、のちに深く悔いることとなる。数世紀にわたって人を害する放射能の本質を知っていたアメリカは、この時原爆犠牲者の血を採集、ヒトゲノムの研究を開始している。20世紀末全解読が完成したヒトゲノムの研究の発端はヒロシマにあったのだ。

共振現象

1953年、時の米大統領アイゼンハワーは突然 ‘Atoms for Peace’ を唱えた。何故この時なのか？ 何故この年将来を嘱望されていた若き衆議院議員中曽根康弘が議員でありながらハーバード大学に招待留学したのか？ 板垣雄三氏は、イランのイスラーム革命、エジプト・イスラエル平和条約、イラクのフセイン政権成立、米国スリーマイル島原発事故が同時に起こる1979年と、1986年米軍がカダフィ殺害を目論んだトリポリ爆撃を強行したその10日後に起こったウクライナのチェルノブイリ原発事故の例、更に2011年初頭の「アラブの春」と3.11を引き、シンクロシティ（共時性）すなわち世界の共振現象を指摘している⁸⁾。これらは単に暗合と言うべきものであろうか？

アメリカが原子力の平和利用を言いだしたのは、実は50～53年の朝鮮戦争と無関係ではない、のである。実はこの戦争を戦ったのはイラク進攻時のようなアメリカ軍ではなかった。れっきとした国連軍である。板門店に翻るのは星条旗ではなく国連旗なのだ。何故それが可能だったのか？ それは安保理で拒否権を持つソ連が当時国連をボイコットしていたからである。国連では西側の「自動的絶対多数」がすべてを支配しているのでそこに居ても意味がない、と。しかし朝鮮戦争のインパクトによりソ連は態度を変える。国連組織への再加盟が西側と取引され、一国一票の国連組織でソ連だけは3票を持つという奇妙な妥協が実現しソ連陣営が国連システムに復帰するのが1954

8) 2011年10月31日、地球システム・倫理学会における発表、同学会「会報」No. 7に収録。インパクト出版会 Impaction 182, 2011に同氏による関連論説。

年、すなわち日本が駆け込みの形で原子力開発予算を組んだ年である。その意味するところはこうだ。ソ連がアメリカと同じクラブに入ったことにより核戦争の危険が遠のいたその時、作りすぎた核燃料のはけ口として示された道が原発であったということだ。それは「原子力の平和利用」という美名のもとに行われた。

言葉の欺瞞

「ペンは剣よりも強し」というが、人心を導くのに言葉ほど強いものはない。「核の平和利用」という表現が生まれた Atoms for Peace は心地よく響いた。日本では翻訳語にこうした心理的操作が用いられた。英語では Nuclear weapon, Nuclear power といい、フランス語でも Arme nucléaire, Centrale nucléaire と呼ばれるものが、核廃絶を訴えるこの日本では、何故一方は「核」、もう一方は「原子力」と使い分けられているのか？ ここには敗戦を終戦、占領軍を進駐軍、連合軍組織を国際連合と訳したような言葉による心理操作がうかがわれる。だからこそ最も危険でその害悪を何万年も子孫に残すエネルギーがクリーン・エネルギーと呼ばれてきたのである。

未来世代に途方もない負債を残し、身体的危害を加える行為は倫理の根本に反する行為である。このような行為が自由の名のもとに正当化されてきた背後には、デカルトの目の当然の帰結として「現存する個人」にしか人権を見ないフランス革命以来の人間観、更にそのような観念を導きだした啓蒙主義の心身二元論、主客二分論がある。人と人の関係に限られる「生命倫理」、人とそれを取り巻くものとしての環境 Environment の語を用いた「環境倫理」の語は注意して用いる必要がある。人は自然の一部であるとの自覚はここにはない。

おわりに

文明はいまや「成長」の語そのものを考え直す時にきている。飛矢のごとく直進してきた「近代文明」は、折り返し点に立ったのだ。ブータンのワンチュック国王の説く GNH の価値観、またセルジュ・ラトゥーシュのいう「脱・成長」⁹⁾ を考えるべきである。余りにも父性的・理性至上主義的・西欧

9) Serge Latouche の説く Décroissance。邦文では『経済成長なき社会発展は可能か？』『〈脱成長〉は世界を変えられるか？—贈与・幸福・自律の新たな社会へ』、共に中野佳裕訳(作品社) 参照。

的な「力の文明」のもとに母なる大地を支配し統御し、そして破壊してきた人類は、その倨傲によって、追い求めてきた成長と進歩の果てに限りない苦悩を見出し、その中で自らを滅ぼそうとしている。この文明の直線的時間論の内包する「終末」が現実のものとなりつつある。

今目前に迫った破滅から人類が生き残るためには、文明の折り返し点を見据えるべきだ。そのために人類の心底にたまねく宿っていた母性原理を見直し、そこから導きだされる「いのちの文明」へと文明そのものの姿を変えねばならぬ。即ちわれわれの直面しているのは二元論に由来する近代文明の危機であり、聖俗の葛藤ゆえに変身した西欧がもたらした人類史上の異常時代のもたらした危機であると、その実相を的確に把握することだ。この危機を乗り越えるべき倫理をわれわれは「地球倫理」と呼ぶのである。

かつてサルトルは知識人の義務としての Engagement を語った。それは「政治参加」と訳されたが、私はそれを「ペンを声とする」ことと考える。言葉が欺瞞を振りまくのではなく、真の「ことの葉」として、響きとなり、滴り落ちれば、それは泉となり、小川となり、やがて大河となって行く。そこにあるべきは新しい理性、すなわち感性・霊性と響きあう理性でなくてはならぬ。父性と母性の均衡を尊ぶその新しい理性こそが筆者とともに松本亮三氏も提唱する「総合知」を生み出すであろう。

人類に火をもたらした故に宿業にさいなまれたプロメテウスには弟がいた。エピテメウスという。その妻がパンドラである。

パンドラは禁じられた箱を開ける。そこから人類にあらゆる災いが飛び出してきた、とよく言われる。しかしギリシア神話というものは実は奥深いのだ。すべてが飛び出したパンドラの箱の奥には実は一つのもが残っていた。それが「希望」である。我々はそれに賭けよう。

参考文献

- 『地球文明の危機』 稲盛和夫編（東洋経済新報社）
- 『日本の理想 ふじのくに』 川勝平太（春秋社）
- 『対論 文明の原理を問う』 安田喜憲ほか（麗澤大学出版会）
- 『真の文明は人を殺さず』 小松裕（小学館）
- 『トインビーとの対話』 吉澤五郎（第三文明社）
- 『世界大不況と環境危機』 金子晋右（論創社）
- 『公共哲学からの応答』 山脇直司（筑摩書房）

- 『いのちを語る』日野原重明・アルフォンス・デーゲン・木村利人（集英社）
『科学と文化の対話—知の収斂』服部英二監修（麗澤大学出版会）
『文化の多様性と通底の価値』服部英二監修（麗澤大学出版会）
『「対話」の文化』服部英二・鶴見和子対談共著（藤原書店）
『文明は虹の大河』服部英二（麗澤大学出版会）
『地球との和解』服部英二・立木教夫監修（麗澤大学出版会）